Annual Report 2023

認定特定非営利活動法人 Living in Peace

社会のことも、私事(しごと)に。

私たちは、すべてのメンバーが仕事などの本分を別に持ち、互いの時間を持ち寄って活動しています。
社会の可能性を信じ、立場によらずその変革も「しごと＝私のこと」とする人たちの力で、
真に平等な機会のある社会の実現を目指します。

Living in Peaceが実現したい未来

～新たなミッションステートメントと新事業に向けた取り組み～

設立以来16年間、Living in Peaceは「すべての人に、チャンスを」という
ビジョンの実現に向けてさまざまな課題に取り組んできました。
その間組織は大きく成長し、機会の平等を取り巻く問題も徐々に変化してきています。
組織としての求心力を高め、その力を最大限に発揮して、真に解決すべき課題と向き合うために、
2023年、Living in Peaceは活動の具体的な方向を示すミッションステートメントを新たに策定しました。
その策定をリードし、団体全体の舵取りをする経営企画チームのメンバーに、
策定の経緯とこれからのLiving in Peaceが目指すものについて聞きました。
また、今後注力していくべき新規事業の開発に取り組むこどもプロジェクトR&Dチームの活動をご紹介します。

MISSION STATEMENT

Living in Peaceのミッションステートメント

目指すもの

機会の不平等に起因して困窮しているにもかかわらず、十分な社会的支援が及んでいない人たちが同じ社会の一員としてともに活躍できる世界をつくります

提供する価値

社会的認知に乏しい社会課題に着目し、社会に広く喚起、啓発するとともに、より多くの個人や団体がその課題解決に参画できる仕組みを創出します

事業のありかた

既存の枠組では解決が難しい社会課題に対して、本業・本分を別に持つ多様なメンバーの力を結集し、様々なステークホルダーとも協働して解決を目指します

組織力向上のために ミッション ステートメントを策定

湖山勝喜 Katsuyoshi Koyama

Living in Peace 理事　経営企画チームメンバー
マイクロファイナンスプロジェクト所属
本業：フィンテック企業・リスク管理
コロナ禍でたくさんの人が苦しんでいる中で何か人の役に立ちたいと思い、自分のバリューを活かして活動できるマイクロファイナンスプロジェクトに 2021 年 4 月に参加。自分自身や本業で接する人たちとは異なるバックグランドや価値観を持つ仲間とのディスカッションができること、あまり日が当たらないが重要な社会課題に関して理解を深め、実際に改善に向けて取り組めることにやりがいを感じている。

「プロジェクトを超えた共通の良さや強みに気づけば、よりインパクトのある活動につながっていく」

経営企画チームの役割についておしえてください

湖山　設立から 15 年が経ち、Living in Peace（以下、LIP）の活動範囲は大きく広がり、メンバーも 130 名を超す組織へと成長しました。これまではメンバーの想いと行動力を推進力としてボトムアップで活動を進めてきた面が強く、団体全体の統括は理事会が担っていました。しかし、これだけの規模になると数名の理事だけで団体が抱える課題を全てカバーすることが難しくなってきました。そこで、理事会をサポートし、幅広い課題について議論・検討を行うファンクションとして 2023 年初頭に経営企画チームを立ち上げました。

角田　立ち上げ当初は、プロジェクト単位で管理していた寄付金を団体全体で活用できるようにすることを目的としていました。ただ、チームの役割を議論するなかで、資金管理だけでなく、組織全体でのカルチャー醸成や人材の確保など、団体として取り組んでいかなければならない点が他にも見えてきたのです。そこで、アドバイザーの皆様からもご意見をいただきながら、団体の運営全般にスコープを広げることになりました。

湖山　せっかく同じ想いを共有する人たちが集まっているのに、活動がプロジェクトごとに閉じてしまうと、その人たちの力を最大限に活かしきれなくなってしまいます。すべてのメンバーが組織全体の視点で「すべての人に、チャンスを」というビジョンの実現を見据え、そのために必要な取り組みや新しい事業を推進していけるようにしたい。それが経営企画チームの目指すところです。

現在はどのような活動をしているのですか。

角田　マイクロファイナンス、こども、難民の各プロジェクトから数名ずつ、全部で 10 名弱のメンバーが集まり、3 つのグループで活動をしています。1 つは今回のミッションステートメントの策定を行ったカルチャー担当グループ。もう 1 つは現在実施している事業のインパクトを把握し、LIP の強みを最も発揮できる事業への選択と集中を検討するグループ。3 つめは、各プロジェクトから生まれる新規事業についてリソース配分などを全体で管理するグループです。

湖山　参画しているメンバーのバックグラウンドは、コンサルティング、人事、経営企画などさまざまです。いろいろな視点を持った人たちで意見交換をしながら、プロジェクトの間に落ちてしまうような課題を拾い上げるようにしています。

そうした活動の中で、どのような経緯でミッションステートメントを策定することになったのですか。

湖山　LIP には、「すべての人に、チャンスを」というビジョン、「機会の平等を通じた貧困削減」

というミッション、団体の特徴を表す「社会のことも、私事（しごと）に」というタグラインがあります。メンバーはこれらを共有はしてはいるものの、実際の活動はそれぞれが所属するプロジェクトが中心で、また全員がプロボノでオンラインミーティングを中心に活動を進めているという性質からも、LIP という組織の全体最適の観点で意思決定や行動をすることが難しいという課題がありました。そのため、日々の活動の中で意識できるより具体的な指針が LIP という団体レベルで必要ではないかという議論から、ミッションステートメントの検討が始まりました。

角田　湖山さんがつくってくれたたたき台をもとにまずは経営企画チームのメンバーで草案を練り、各プロジェクトからメンバーを募って意見をもらいました。半年ほどかけて議論を重ね、2023 年 10 月に確定しました。ただ、これは固定的なものではなく、今後も見直しを続けてブラッシュアップしていく予定です。

策定にあたって苦心した点はどんなところですか。

湖山　誰に対して、何のために、どうやって支援を行うのかを明示する必要がありましたが、やはりプロジェクトごとに支援対象や方法は異なるので、そうした違いを超えて共通するものは何なのかを突き詰めて考え、言語化することが難しかったです。

角田　策定して終わりではなく、メンバーが実際に活動の中で意識してこそ意味があるものなので、みんなに「私事」として捉えてもらえるようになるまで浸透させることが次の課題です。ミッションステートメントへの理解を深めることを目的としたロングミーティングを開催するなど、浸透のための施策を進めています。

新たなミッションステートメントに沿った今後の活動への想いを聞かせてください。

湖山　メンバーのみんなに LIP をより好きになってもらい、帰属意識を高めてもらいたいですね。ミッションステートメントを意識して、自分の関わっている活動だけでなく団体全体をより深く理解することで、プロジェクトを超えた共通の良さや強みに気づき、そこから新たなコラボレーションが生まれれば、よりインパクトのある活動へとつながっていくと思います。

角田　メンバー全員が、LIP の活動を通して実現したい社会を描きながら事業を進めていけるようにしたいです。メンバー自身が持っている活動へのモチベーションと LIP として実現したい姿が結びつくことで、組織の力を最大限に発揮できるようになるはずです。また、事業を評価する上では、各事業の巧拙や、さらに発展させるためにはどうすればよいのかを検討するための判断軸があることも大事。ミッションステートメントはそうした判断が必要になった時や困りごとが生じた時などに立ち返る指針にもなると思います。

「メンバーのモチベーションと団体のビジョンが結びつくことで、組織の持つ力を最大限に発揮できる」

角田真理 Mari Kadoda

経営企画チームメンバー　こどもプロジェクト所属
本業：メーカー・事業戦略
2021 年 9 月よりこどもプロジェクトで活動。おばあちゃんっ子だった幼少期に自分を見てくれる大人の存在の大切さと実の親ではない人のもとで育つことの難しさを知り、大学時代に学習支援に携わることで信頼できる大人・相談できる大人の存在の大切さを改めて実感したことが活動の原動力となっている。経営企画チームでは本業で新事業開発のサポートをしている経験を生かし、組織の力の最大化や新事業が生まれやすい環境づくりに取り組む。

こどもプロジェクト R&Dチームの活動

「社会の中でいまだ光の当たっていない課題に目を向け、私たちならではの解決方法を見出したい」

こどもプロジェクトでは児童養護施設の建て替え支援、奨学金、キャリア教育といった事業を中心に、国内で困難な境遇にあるこどもたちの機会の平等を目指す取り組みを進めてきました。その間にこどもの貧困という課題に対する社会の認識は変化し、行政やNPOによるさまざまな支援が広がってきた一方で、新たな課題が生まれたり、いまだ支援の届かない領域が見えてきたりもしています。

そこでR&Dチームでは、「すべてのこどもに、チャンスを」というビジョンを達成するためには、今取り組んでいる事業以外にどのような支援が求められているのかを議論し、事業化に向けた計画を進めています。

これまでに、支援を必要とする家庭に対するアウトリーチや地域拠点づくりの領域で先進的な取り組みを行っている組織・団体の活動を横展開する方法を検討してきました。いずれも多様なステークホルダー間の連携や調整に課題があり、事業化には至りませんでしたが、協働の難しさを実感するとともに、LIPだからこそできること・すべきことは何かをあらためて考えるプロセスとなりました。

現在は、社会的養護下で暮らすこどもたちへの新たな金銭的支援の仕組みを検討しています。LIPのものを含め奨学金制度は数々あるものの、本当に必要なところに十分な支援が届いていないのではないかという問題意識を持っていた中、キャリアセッション事業で接する児童養護施設のこどもたちから「アルバイトが忙しくて部活ができない」という声を聞いたことで、高校生に対する金銭的支援の必要性を認識し始めました。そこからチームで議論を深め、児童養護施設よりも社会的認知度の低い自立援助ホームの課題に着目し、親元を離れて経済的負担や高校中退といった問題に直面している15歳以上のこどもたちへの支援のスキームを模索しているところです。

また、実親子支援チームの取り組みとして、望まない妊娠で出産した母親が専門的なコンサルティングを気軽に受けられるような仕組みについても検討を進めているほか、P12で紹介している「わが町にしなり子育てネット」の支援もR&Dからスタートしたものです。

R&Dチームにはこどもプロジェクト全体から20名ほどのメンバーが参加しており、それぞれの活動における議論の中から生まれてきたテーマに対し、関心を持つメンバーが自然と集まってくるといった感じです。ミッションステートメントにもあるように、社会の中でいまだ光の当たっていない課題、既存の枠組では解決できない課題に目を向け、LIPの強みを生かした私たちならではの方法を見出していけるよう、今後も学びと議論を重ね、アクションにつなげていきたいと思っています。活動を推進しています。

衣川正明 Masaaki Kinugawa

こどもプロジェクト所属
本業：メーカー・新規事業開発
長年会社員として勤務し、会社の中では責任ある仕事を任されるようになったものの、社会への貢献ができているのか、もっとやるべきことがあるのではないかと自問し、若い人たちが高い意識と透明性を持って活動しているLIPに関心を抱いて2022年7月にこどもプロジェクトに参加。課題を学ぶところから事業を企画するまでのプロセスに関わりたいと思い、R&Dチームで事業化の検討に取り組む。世代を超えてそれぞれの立場からこどもたちの育ちを支える活動を実現したいと考えている。

プロジェクト横断の活動

Living in Peaceでは現在、3つのプロジェクトを横断して取り組む事業として、外国ルーツのこども支援、グリーンビジネス支援を実施しています（P17～18参照）。いずれも既存のプロジェクトから派生してスタートした事業ですが、プロジェクトの枠を超えて団体全体からメンバーが参加し、活動を推進しています。

Living in Peaceの社会的インパクトモデル

Living in Peaceは、3つのプロジェクトと組織横断的な活動を通じて、
機会の平等の実現に取り組んでいます。

INPUT	PROJECT	ACTION	OUTPUT	OUTCOME		GOAL
プロボノ メンバー 事業 パートナー 寄付者の 皆様からの ご支援 出資者の 皆様からの 出資金 監事・ アドバイザーの 皆様からの ご支援	ALL	社会人や学生がともに活動する	メンバーが本業の知見を活かして活躍する	活動を通じて本業とは別の知識やスキルを得る	活動を通じて得たスキルを本業やさらなる社会活動に活かす	社会のことも、私事に。 すべての人に、チャンスを。
		情報発信	SNS 等を通じて活動を発信する	より多くの人が社会課題について知る	社会課題に取り組む人が増加する	
		日本に暮らす移民難民のこども支援	現金給付などの直接的な生活支援と、交流・体験の機会を提供する	支援対象者が厳しい時期を乗り切る	支援対象者が将来に向かって進むことができる	
		海外の農家支援	コーヒー農家の環境に配慮した生産、及び適正価格での販売を支援する	環境に配慮した生産の実施および購入者の気候変動に関する認知が進む	生産者及び購入者による気候変動対策が進む	
	マイクロファイナンスプロジェクト	途上国の人たちの金融包摂推進	自立した生活を送るための金融アクセスを提供する	支援対象者の生活水準が向上する	支援対象者が新しい挑戦ができる	
		途上国におけるソーシャルビジネス支援	途上国の社会的起業家が事業拡大に必要な非金融支援を提供する	支援対象者のビジネスが拡大する	社会課題認知を進めるとともに、対象事業に携わる人々の生計が安定する	
	こどもプロジェクト	困難な状況にあるこどもたちへの直接支援	こどもたちへ金銭的・非金銭的支援を行う	こどもたちが将来のために学び続ける環境を得る	こどもの将来の可能性が拡大する	
		困難な家庭の課題に取り組む団体への間接支援	支援団体への金融的・非金融的支援を行う	支援団体の活動が拡大する	より多くのこどもたちが支援を得ることができる	
	難民プロジェクト	日本に暮らす難民の日本語習得支援	日本で生活するための日本語の基礎を習得する支援を行う	支援対象者が日本語を活かして日本社会での関係性を構築する	支援対象者が日本でより活動を拡大できるようになる	
		日本に暮らす難民の就労支援	自立した生活を送るための就労機会を獲得する支援を行う	支援対象者の生活水準が向上する	支援対象者の日本の生活基盤ができる	

Living in Peaceが見据えている課題とこれまでの成果

機会の平等実現には、まだ多くの克服すべき課題があります。
Living in Peaceは3つのプロジェクトを通じてこれらの課題に取り組み、
これまでに以下のような成果を上げてきました。

	解決すべき課題	Living in Peaceの活動成果
マイクロファイナンスプロジェクト	世界で銀行口座を保有していない成人の数 約14億人 The Global Findex Database 2021	マイクロファイナンスの認知向上フォーラム 合計動員数 1,000人以上 MF 投資ファンド数 合計調達金額 10件　3億1,731万円
こどもプロジェクト	さまざまな理由で実親と暮らせないこども 約4万2,000人 児童養護施設入所児童等調査（平成30年度） 日本のこどもの貧困 約7人に1人 国民生活基礎調査の概況（2019年） 年間虐待相談対応件数 20万7,659件 令和3年度児童虐待相談対応件数	施設小規模化建替え支援 1施設あたり 3,000〜5,000万円×3施設 施設退所者向け奨学金支援 1人あたり最大 288万円×16名
難民プロジェクト	2022年の日本の難民申請者数 3,772人 うち難民認定者数 202人 法務省「我が国における難民庇護の状況等」	就職活動の伴走支援を行った難民の方々 13名（うち8名が就職、5名は支援中） LIP-Learning（難民への日本語学習支援プログラム）の提供 66名

マイクロファイナンスを通じた金融包摂事業（ケニア）

活動の詳細はこちら

ケニアでのファンド運用支援

ケニアでタクシー事業者向け中心に融資を行うHAKKI AFRICAに対するファンド（LIP-HAKKIケニアファンド）への出資を2023年1月より開始しました。出資開始後は、現地での経営状況や顧客の状況をまとめた月次のモニタリングレポートを出資者に送付し、ファンドのスキームやケニアの経済・政治情勢のほか、顧客やスタッフのインタビューなどさまざまな情報を発信しています。

LIP-HAKKIケニアファンドの実績

貸出累計額：8.6億円[*1]
ファンド出資時[*2]**比　＋3.9億円**
総顧客数　：1,384人[*1]
ファンド出資時[*2]**比　＋681人**

＊1 2023年10月現在　＊2 2023年1月

支援するマイクロファイナンス機関からの声

HAKKI AFRICA
Kevin Ndirangu 氏

中古車ファイナンスの申請・貸与・返済のマネージメントに従事しています。現在仕事をしながら大学院に通い、企業のオペレーションと人事について学んでいます。

ケニアはインフレが続き、経済的に不安を抱える人が増えています。その中でHAKKIは、人々が経済的に自立するための手助けができていると感じています。他にも多くの類似の企業がありますが、HAKKIはマイクロファイナンス企業の中でも低い金利で融資を実現しており、社会への貢献ができていると実感します。

マイクロファイナンスの顧客からの声

HAKKIから融資を受ける前は、車の所有者に毎月の使用料3万ケニアシリング程（1KES ≒ 1円）を支払ってタクシードライバーをしていましたが、それだけの金額を支払い続けても、いつまでも自分の車を持つことができない状況を脱却したいと思っていました。そんな中、車両購入資金のローンを受けることができると知りました。元々いくつかの会社を訪問して話を聞くつもりでしたが、受付での対応から担当者の説明まで丁寧でよく理解できたので、その場で借りることを決意しました。

車の購入資金52万ケニアシリング（約52万円）を返済期間42か月で借り入れ、11か月目となる現在も一度も遅延なく毎月の返済を続けています。

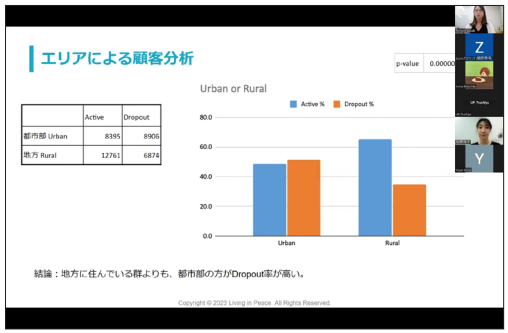
やりがいを感じるのは、プロの運転手として仕事ができることです。自営業をしていた際には乗客に相手にされないこともありましたが、今は目的地までスムーズに送り届けて感謝していただけることも多く、嬉しいです。また、稼いだお金によって返済が進んだ時や、子どもの学費や食費を支払えた時にもやりがいを感じます。食卓にたくさんのパンを満足に並べられると、頑張って働いて良かったと思います。今後は、今回の融資を完済した後にまた借入をして車両をもう1台購入し、資産ポートフォリオを増やすことが目標です。家計を安定させたいです。

マイクロファイナンスを通じた金融包摂事業（ミャンマー）

活動の詳細はこちら

ミャンマーでのファンド運用支援

2019 年から支援しているミャンマーのマイクロファイナンス機関 MJI エンタープライズのファンドについて、社会的インパクト評価のための調査・分析を開始しました。コロナ禍・クーデター状況下において、返済継続ができた顧客、離脱に至った顧客について層別化分析を行い、年齢・教育歴・結婚歴・居住エリアごとの離脱率を算出したほか、MJI 社員の幸福度や仕事の満足度、自己投資の時間・資金などを調査しました。これらの調査結果からは、MJI の事業方針や有事における対応は、顧客・社員の双方にとってプラスのインパクトを創出していたと考えられます。



2023 年 8 月 6 日には MJI と共催で「ミャンマーのマイクロファイナンス機関が向き合うソーシャルインパクト～生活向上への影響～」と題したイベントを開催し、インパクト評価の分析内容や結果を報告

ミャンマーMJI貧困削減ファンドの実績

貸出累計額：549 億 6,897 万円[*1]
ファンド出資時[*2] **比　▲ 50 億 9,541 万円**

※ COVID-19・軍事クーデター影響

総顧客数：1 万 9,803 人[*1]
ファンド出資時　＋3,120 人

＊1 2023 年 10 月現在　＊2 2019 年 8 月

支援するマイクロファイナンス機関からの声

MJIエンタープライズ　職員一同

いつも MJI にご関心を持って下さり、誠にありがとうございます。

2023 年には、MJI の事業活動が顧客の皆様の生活にどのような影響を与えているのかをさまざまなアンケートを通じて調べてきました。経済状況の改善のみで人が幸福になるわけではないと指摘されることがありますが、MFI の存在が貧困層の方々の金融アクセスを改善し、事業拡大等の一助になっています。MJI は、皆様の思いをミャンマーの方々の幸せにつなげられるよう引き続き金融事業に邁進したいと考えております。今後ともご支援のほどよろしくお願いいたします。

マイクロファイナンスの顧客からの声

2019 年から MJI より融資を受けています。以前は、資金調達が困難な場合、高利の非正規金融業者から借りなければなりませんでした。MJI のローンオフィサーは、どういう風に資金を使うとどれだけ収入が得られるかを教えてくれます。MJI は、自分の資金でビジネスを始めるのが難しい女性に、低金利で融資してくれるということを知りました。今は友達にもマイクロファイナンスについてアドバイスしています。

今後の夢としては、より多くのミシンなどの機械を使って、多くの人が集まる場所でのビジネス展開を行いたいです。もし自分が店を持つことができたら、一緒に洋服屋も開き、衣料品事業全般まで拡大したいです。また、デザイナーとして学び続け、成功したいです。

MJI には女性の顧客が多くいます。ローン融資の際には低い利子で貸してくれるため、投資家には感謝しています。他の機関でローンを借りようとすると利子が 3 ～ 5 倍必要です。MJI が成功し、将来、すべての人々に対して長期的なビジネスローンを提供できるようになることを祈っています。

2023年の活動ハイライト ● こどもプロジェクト

永和町プロジェクト

活動の詳細はこちら

りっぷキッチン（左）、フードパントリーの際に実施したハロウィンイベント

プログラミング教室（左）、りっぷらいぶらり

こども食堂、フードパントリーを継続実施

奈良県大和高田市の「永和町ベース」においてこども食堂「りっぷキッチン」を月1回開催し、年間（2022年12月～2023年11月）でのべ210名のこどもたち・地域の方々が参加しました。また、不定期に開催したフードパントリーでは、のべ596名のこどもたちにお米、レトルト食品などの食材やお菓子を配布しました。昨年に引き続き、大和高田市内の6か所のこども食堂と合同で開催した食支援イベント「つながるチカラ大作戦」の第4弾も実施し、752人のこどものいる357世帯への支援を行いました。

プログラミング教室「LIPLAB（りっぷラボ）」を開催

永和町ベースにて小学生を対象とした無料のプログラミング教室を月2回開催し、のべ252名のこどもたちが参加。こどもたちが自由な発想でものづくりに集中できる場となっており、継続して参加しプログラミングスキルが身についた子が新しく入った子をサポートする場面も増えてきています。

放課後自習室「りっぷらいぶらり」、不登校居場所支援「ぼんやりカフェ HokoHoko」を開始

こども食堂と併催で元塾講師の地域ボランティアの方にこどもたちの宿題を見てもらう自習室を開始。また、同じく地域ボランティアの方が主体となり、不登校のこどもたちやその保護者の方々が自由に過ごせる居場所の提供を始めました。

地域ボランティア、他団体と連携

永和町ベースでは、さまざまな活動の実施において地域ボランティアの方々や他の支援団体と連携しています。今年は年間でのべ30名の地域ボランティアの方々に、調理や配膳、食材の配布、学習指導にご協力いただきました。また、コストコホールセールジャパン、全国こども食堂支援センター・むすびえ、広陵高田ビジネスサポートセンター KoCo-Biz、株式会社ナコーには食材、お菓子、衣類などをご提供いただいたほか、LIPLABには学生団体ハートレスQのメンバーに講師を務めていただきました。

利用者・参加者の声

- 物価高で金銭的に苦しい中、本当に助かります。（こども食堂利用者）
- カップヌードルなどたくさん提供いただけて助かります。夏休み中はとても助かります。（フードパントリー利用者）
- 楽しく教えていただいて感謝しています。（プログラミング教室参加者の親）
- おもしろすぎて帰るのが遅くなったとこどもが言っていました。（ぼんやりカフェ HokoHoko 利用者の親）
- おいしそうに食べている姿や楽しそうに遊んでいる様子にこちらまで嬉しくなりました。（地域ボランティア）

キャリアセッション

活動の詳細はこちら

「おしごとリップ」を継続実施

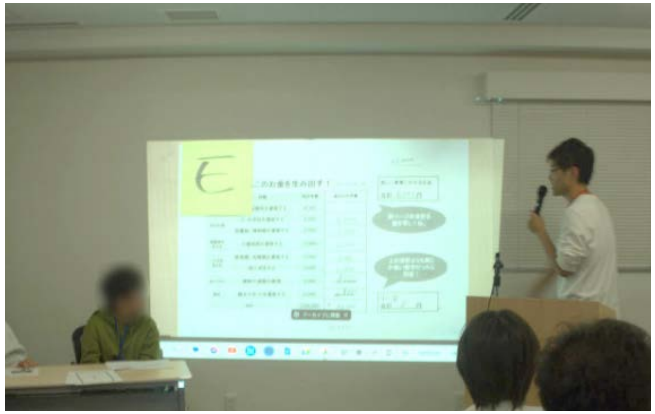
児童養護施設で暮らすこどもたちを対象に、将来の職業の選択肢を広げるとともに非認知能力の向上を目指すキャリア教育プログラム「おしごとリップ」を、関東と関西の2拠点でそれぞれ月1回実施。製造業、サービス業、社会インフラなどの業界について講義とワークショップを組み合わせたプログラムを実施し、関東では17名、関西では13名のこどもたちが参加しました。

他団体へのプログラム展開を継続

より多くのこどもたちにキャリアセッションを体験してもらえるよう、活動の趣旨に賛同する3つの団体にノウハウを共有し、プログラムの横展開の取り組みを継続しています。

非認知能力向上に向けたプログラム強化を推進

こどもたちに必要な非認知能力を定義し、その向上のための施策を整理。成長段階に応じた変化をモニタリングする仕組みの検討にも着手しました。今後これらの施策や仕組みを「おしごとリップ」に導入し、非認知能力を向上するプログラムとして強化していきます。



関東（左）と関西で開催した「おしごとリップ」

「おしごとリップ」参加者・施設関係者の声

- ワークを通して少しでも仕事を体験でき、これから変化するかもしれない将来の自分に役立つと思った。（参加者）
- 各業界の専門家から直接話を聞くことで、インターネットで調べるよりも詳細を知ることができた。（参加者）
- おしごとリップに参加して、説明力がついたと思う。学校で皆の前で夏休みの宿題の説明をしたが、こんなにうまくできるとは思わなかったし、先生からも褒められた。（参加者）
- メンバーが長期的に関わってくれることで、信頼関係を築けるようになったり、他者との接し方を学んだりできているようです。（自立支援コーディネーター）
- 苦手な発表を頑張るという前向きな発言があったとのことで、自分の特性と向き合いながら頑張ろうとしていることを知り、変化を感じました。（施設職員）

2023年の活動ハイライト ● こどもプロジェクト

奨学金

活動の詳細はこちら

児童養護施設退所者への奨学金給付と伴走支援を継続

7名の奨学生に家賃補助として月額上限60,000円（実費）、オンライン授業参加のための通信費補助として月額5,000円の奨学金給付を継続。半年ごとに資金シュミレーションを行い、面談を実施して学生の状況と卒業に影響する課題がないかを確認しています。2023年3月には3名の奨学生が4年制大学を卒業し、支援を完了しました。また、2022年3月から休学していた1名の奨学生が2023年4月より復学しました。

奨学生の声（2023年3月に卒業）

皆様のご支援のお陰で無事に大学を卒業することができました。大学生活を振り返ってみるととても充実した4年間でした。一番思い出に残っているのはゼミの活動です。ゼミでは他人に論理的に説明する能力などを学ぶことができました。また、実際に社会で必要になる能力も鍛えることができました。友人と一緒に協力し合って活動し、わからないことがあると先生が親身になって教えてくださいました。卒業後は携帯電話の販売の仕事をしています。大学で学んだことを活かして、お客様に提案できるようになりたいです。ご支援をくださった全ての方に心からお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

2023年の活動ハイライト ● こどもプロジェクト

お金の教育

活動の詳細はこちら

生成AIを活用した「奨学金チャットボット」を開発

社会的養護下のこどもたちが大学や専門学校への入学時に受給可能な奨学金に関する質問に対して回答してくれるAIチャットボット「奨学金チャットボット」を開発し、提供を開始しました。

「進学シミュレーション」の展開を拡大

2022年3月にリリースした、社会的養護下のこどもたちが進学にあたって資金計画を立てるためのシミュレーションサービス「進学シミュレーション」の展開拡大に向けて、全国の児童養護施設に案内を送付したほか、施設の職員の方々を対象にシミュレーションや奨学金について解説する説明会を開催しました。

「進学シミュレーション」と「奨学金チャットボット」の画面

「お金の教育講座」参加者・関係者の声

- 大人になるうえで大事なことを知れた。（「お金の教育講座」参加者）
- 制度を知らないと社会に出たときに損をしてしまうので、今のうちから学んでおくことが重要だと思った。（「お金の教育講座」参加者）
- 施設ではお金の感覚は育みにくいので、このようなプログラムはありがたいです。（「お金の教育講座」に同席した施設職員）

「お金の教育講座」を開催

児童養護施設を退所予定の高校生を対象にお金に関するリテラシーを育む「お金の教育講座」を引き続き開催し、3施設の14名のこどもたちがオンラインで受講しました。年間を通じて全6回の開催を予定しています。

2023年の活動ハイライト ● こどもプロジェクト

里親支援

活動の詳細はこちら

世田谷区における里親制度の普及啓発をサポート

世田谷区の児童養護施設・東京育成園が運営するフォスタリング機関ともがきとの協業を継続し、「里親子フレンドリーシティ」の実現を掲げる世田谷区の取り組みの一環として、里親制度の認知と理解を広げるため、東急世田谷線でのラッピング電車の制作のほか、ウェブサイト SETA-OYA 内の特設ページの開設、グッズやチラシの制作を支援しました。

支援者の声

■当園の受託する里親支援業務の拡大に伴い、引き続きご協力いただいているリクルーティング以外にもさまざまな形で連携・協働いただき、里親子への幅広い機会提供につながっています。（東京育成園の職員の方）

里親制度をテーマとしたラッピング電車（東急世田谷線）の制作に協力

2023年の活動ハイライト ● こどもプロジェクト

大阪市西成区エコシステム構築の支援

活動の詳細はこちら

「わが町にしなり子育てネット」の報告書や記念誌の制作を支援

「わが町にしなり子育てネット」の事務局団体をサポート

休眠預金活用による助成を受けた大阪市西成区の官民ネットワーク「わが町にしなり子育てネット」の事務局団体である NPO 法人子育て運動えんへの伴走支援を実施。また、2022 年 10 月から 2023 年 1 月まで、東京大学、大阪大学、西南学院大学の教員や大学院生の協力も得て事業評価のためのインタビュー調査等を行い、助成事業の最終評価報告書を作成しました。

支援者の声

特定非営利活動法人子育て運動えん 代表理事　関口淑枝氏

助成事業を受けるにあたっては、申請段階から Living in Peace の皆さんのお力をお借りして、3 年度にわたる事業展開および報告、完了に至るまで、何度も西成に足を運んでいただき、またオンラインミーティングを定期的に設けてくださり、伴走し続けていただきました。

開始後まもなくコロナ禍の影響を受け、事業を進めていけるのかという大きな不安を抱きました。ネットワークでの合意形成や事務局としての準備や調整、複雑な会計、運営システムなど、これまで現場に専念してきた私たちにとってはわからないことだらけでしたが、その都度 Living in Peace の皆さんに丁寧に支えていただきました。何より、わが町にしなり子育てネットが 20 年継続してきた取り組みについて「日頃あたりまえのようにされているけれど、すごいことなんですよ」と、とても価値のあることだと教えてくださったこと。自分たちの活動をそんな風に見たことがなかったので、そうした視点を持てたことは大きな力になりました。

2023年の活動ハイライト ● 難民プロジェクト

LIP-Learning

活動の詳細はこちら

日本に暮らす難民 23 名の日本語学習を支援

日本に暮らす難民の方々の経済的自立、社会統合を目指し、日本語学校との提携により、各受講者がレベルに合わせた授業を受講できるよう支援。今年度は 23 名の受講生を支援し、事業開始からの受講生はのべ 66 名に。

日本語教育機関との連携を拡大

これまで提携してきた TIJ 東京日本語研究所に加え、ISI 日本語学校とも業務提携し、通学による日本語学習の機会の提供を開始。また、愛知県小牧市で外国籍のこどもの日本語教育に取り組んでいる NPO 法人にわとりの会との協業により、難民向け日本語学習講座のトライアルを実施しました。

卒業生を対象としたイベントを開催

LIP-Learning の 2020 年度・2021 年度卒業生を対象に、書道体験のイベントを開催しました。受講終了後も Living in Peace のメンバーや他の卒業生との交流の機会を持つことで、日本語力の向上や関係性の維持につなげています。

卒業生向けのイベントでは家族も一緒に書道を体験

LIP-Learning受講者の声

- 1 年間のプログラム期間中、ご協力とご苦労を本当にありがとうございました。LIP のメンバーと先生方には本当に感謝しています。たくさんのことを学びました。そして、私の日本語能力は向上しました。次の機会も日本語の勉強を続けたいと思います。
- このクラスのおかげで日本語能力試験 N2 に挑戦することができました。このクラスがなかったら受験できなかったと思います。
- 何よりも文章を書くことと読むことが上手になりました。

2023年の活動ハイライト ● 難民プロジェクト

就労支援

活動の詳細はこちら

難民の大学生の就職活動を伴走支援

日本に暮らす難民の大学生を対象に、自己分析、履歴書の添削、面接の練習などをサポートし、それぞれの個性に合わせて希望の仕事に就けるよう支援。その一環として、多様な業界で本業を持つ Living in Peace のメンバーが仕事の話や就職活動の体験談を共有するイベントを開催しました。2018 年から累計 23 名の学生を支援し、うち 8 名が国内の企業への就職を実現。現在は 5 名のサポートを継続しており、1 名が内定を得ています。

国連難民高等弁務官事務所駐日事務（UNHCR）など他団体との連携を継続

UNHCR 難民高等教育プログラム（RHEP）の奨学生向けに就活セミナーを開催したほか、中途採用における難民の採用を促進する取り組みに向けてさまざまな団体との連携を深めました。

支援を受けて内定を獲得した学生の声

私は大学 3 年生の頃から就活を始めました。何からやればいいのかわからないまま Living in Peace のメンバーの皆さんと面談を重ねて、自分はどのような職に就きたいのか、どんなことが得意なのか不得意なのかを一緒に考えて深掘りをしていきました。皆さんが自分たちの体験談などから私にあったアドバイスをしてくださったので、自分がどんな職に就きたいのかが明確にわかるようになりました。興味のある業界をメンバーの皆さんと絞り、夏休みの際にたくさんの会社説明会やインターンシップに参加しました。また、会社面接の際には面接用の文書添削をしてくださいました。お陰様で内定をいただくことができました。今、振り返ってみると、就活を早い段階から行い、Living in Peace の皆さんのアドバイスを受けてよかったと思いました。このような就活の支援をしてくださる機会をいただき、心から感謝いたします。

2023年の活動ハイライト ● 難民プロジェクト

カルチュラル・ダイバーシティ・インデックスの作成

活動の詳細はこちら

組織の文化的多様性を評価する指標のベータ版を作成

カルチュラル・ダイバーシティ・インデックスは、企業が文化的多様性の向上に向けてノウハウを共有できる仕組みを構築していくための評価指標です。

この指標は、東京大学・筑波大学との共同研究「移民・難民学生のキャリア形成と共創する社会へ―学生の就職活動経験と企業の採用に関する調査報告書―」をもとに、一般社団法人 Welcome Japan の就労分科会において、多様なセクターの方々との協働により作成されました。2023 年度はまずベータ版を作成し、「外国ルーツの人々と共に働く ―文化的多様性を推進する Cultural Diversity Index 公開シンポジウム」を 6 月に開催。このシンポジウムの参加者や投資家からいただいたさまざまな意見を参考に、2024 年 6 月の正式版リリースに向けて指標の改善に取り組んでいます。

シンポジウムでは指標の策定背景や概要を紹介したほか「文化的多様性を組織で推進するためには」をテーマにパネルディスカッションを実施

2023年の活動ハイライト ● プロジェクト横断の活動

外国ルーツのこども支援

活動の詳細はこちら

外国ルーツのこどもたちに体験プログラムを提供するトライアルを開始

日本に暮らす外国にルーツを持つこどもたちに「自分の将来を考えるきっかけ」を提供することを目的としたトライアル事業として、体験プログラム「おでかけリップ」を年間５回開催。アウトドア活動やテーマパークでの職業体験、古民家での宿泊、農園での野菜の収穫など、非日常的な体験や遠出の機会が少ないこどもたちとその保護者を対象に、さまざまな「おでかけ」を企画・実施しました。今後はプログラムを通じて再認識した外国ルーツのこどもたちが抱える課題について、外部団体とも連携しながら、継続的な支援を検討していきます。

古民家では流しそうめん、スイカ割り、ヨーヨー釣り、農作業などさまざまな体験を通じて日本の夏を満喫

キッザニア東京での職業体験

グリーンビジネス支援

活動の詳細はこちら

営業活動支援のためのインフラ・ツールを構築

インドネシア・バリ島で「気候変動に起因する農家の貧困」に取り組んでいるパートナー、su-re.co（シュアコ）の日本における営業活動を引き続き支援。年間で500kgのコーヒー豆の販売に貢献したほか、さらなる拡大に向けて、コーヒー炭酸飲料、コーヒービールなどコーヒーを活用した新商品を企画しました。コーヒー豆の売上の一部は、生産農家へのバイオガスキットと気候変動に関する教育プログラムの提供に充てられています。

課題の把握と情報発信のために現地でヒアリングを実施

バリ島で現地の農家や焙煎所の訪問、su-re.coメンバーへのインタビューを実施し、導入されたバイオガスキットの様子を視察したほか、事業における課題をヒアリングしました。視察やヒアリングの成果について情報発信を行うとともに、今後の支援における課題の対応を検討していきます。

コーヒーを活用した新商品（コーヒーフレーバートニックウォーター、ミルクコーヒースタウト）

バリ島の農家の方々にはコンポストで有機肥料と煮炊き用のガスを生成するバイオガスキットの使用についてインタビュー

バイオガスキットを導入した現地の農家の声

今年はオレンジの栽培で課題に直面しました。たくさん植えたので土壌が酷使されていることに気づいたのです。さまざまな方法を試しましたが、どれもうまくいきませんでした。ところが、バイオガスから作られる肥料を与えると、オレンジが元気になったのです。今ではすべてのオレンジの木が緑色になり、とても満足しています。

昨年バイオ肥料を与えたキュウリもほとんどが大きくまっすぐに成長しました。今はアボカドの苗に肥料を与える実験をしており、2か月でとてもよく成長しています。以前は高価な農薬を購入していましたがうまくいかなかったので、バイオ肥料がここまで効果があるとは驚きました。

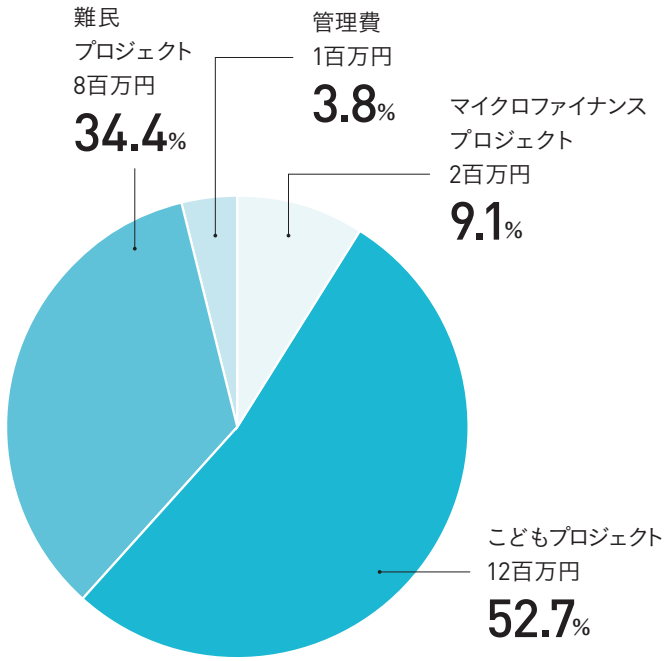
会計報告

活動計算書

（単位：円）

科目	2022年7月期 ①	2023年7月期 ②	前年同期比②－①
Ⅰ 経常収益			
1. 受取会費	1,023,500	880,000	▲ 143,500
2. 受取寄附金	101,892,898	36,918,317	▲ 64,974,581
3. 受取助成金等	0	0	0
4. 事業収益	630,746	1,661,462	＋ 1,030,716
5. その他収益	1,047	7,218	＋ 6,171
経常収益計	**103,548,191**	**39,466,997**	**▲ 64,081,194**
Ⅱ 経常費用			0
1. 事業費			0
（1）人件費	0	0	0
（2）その他経費	115,347,335	22,440,309	▲ 92,907,026
事業費計	115,347,335	22,440,309	▲ 92,907,026
2. 管理費			0
（1）人件費	0	0	0
（2）その他経費	1,366,189	892,651	▲ 473,538
管理費計	1,366,189	892,651	▲ 473,538
経常費用計	**116,713,524**	**23,332,960**	**▲ 93,380,564**
税引前当期正味財産増減額	**-13,165,333**	**16,134,037**	**＋ 29,299,370**
Ⅲ 法人税等	70,000	70,000	0
当期一般正味財産増加額	-13,165,333	16,134,037	＋ 29,299,370
前期繰越正味財産額	72,711,596	59,476,263	▲ 13,235,333
次期繰越一般正味財産額	**59,476,263**	**75,540,300**	**＋ 16,064,037**
受取寄付金	0	15400000	＋ 15,400,000
一般正味財産への振替額	-64,747,041	0	＋ 64,747,041
前期繰越指定正味財産額	64,747,041	0	▲ 64,747,041
次期繰越指定正味財産額	**0**	**15,400,000**	＋ 15,400,000

経常費用の内訳



費用のうち、96.2%が事業運営のために使用されています（管理費3.8%は団体維持のための費用です）。

2022年度は、主に前年度指定正味財産からの振り替えにより経常収益が増加していた反動で、経常収益は▲64百万円減の39百万円となりました。

経常費用は、難民プロジェクトでのLIP-Learninng受講者増加等はあったものの、昨年度こどもプロジェクトでの建替における一括償還があった反動により、全体では前年比▲93百万円減の23百万円となりました。

なお、Living in Peaceは、メンバー全員が他に本業を持ちながらパートタイムで活動しているため、人件費は発生していません。

企業からの支援

Living in Peaceの活動は、企業の皆様からのご支援にも支えられています。

コストコホールセールジャパン株式会社

株式会社ファイントゥデイ

株式会社グッドパッチ

インヴァスト証券株式会社

メットライフ生命保険株式会社

MFS インベストメント・マネジメント株式会社

（アルファベット順）

寄付のご案内

マンスリー・サポーター

マンスリー・サポーターは、毎月定額で継続的にご寄付いただくプログラムです。団体全体もしくは各プロジェクトに対し、月々 1,000 円からクレジットカードによる継続寄付をしていただけます。ご支援いただいた皆様には、メールでの活動報告のほか、イベント情報などを優先的にご案内いたします。

登録はこちらから
https://www.living-in-peace.org/donate/

スポット寄付

月々の継続寄付のほか、ご都合のよいときに銀行振込で寄付いただくことも可能です。 金額もご自身で設定していただけます。ご支援いただける方は、下記宛にお振り込みください。

振込先

楽天銀行第一営業支店（251）
口座番号　普通口座　7282130
口座名義　特定非営利活動法人 Living in Peace 共通口座
カナ表記　トクヒ）リビング イン ピース キョウツウコウザ

※ Living in Peace は認定 NPO 法人です。皆様の寄付金は税制上の優遇措置の対象となり、寄付金控除の適用を受けられます。
※ 寄付額の一部は、団体維持運営費に充当させていただきます。

Living in Peace の Code of Conduct（行動基準）

感謝の気持ちを持つこと	私たちは常に感謝の気持ちを忘れることなく他者と接し、行動します。
他者に共感する気持ちを持つこと	私たちは他者の置かれた状況や環境に関心を持ち、思いを馳せ、自分のことのように感じ行動します。
プロアクティブであること	私たちは活動に積極的に参加し、問題に対してはよく考えると同時に、実際に行動を起こします。
多様性を尊重すること	私たちは組織発展の不可欠な要素として多様性が必要であることを深く認識し、多様な属性を持つ人の参加や多様な貢献の仕方を受け入れ、推進します。
謙虚であること	私たちは相手を思いやり、敬う気持ちを持って他者と接します。 私たちは常に内省に努めることで、自分を客観視します。 私たちは好奇心を持って自らに不足する知識や経験の吸収に努めます。 私たちは自分の行動に誤りがあり、またはそれを指摘された場合には素直にそれを認め、速やかに訂正します。
大志を持つこと	私たちは高い志を持ち、その実現に向けて地道な努力も厭わずに取り組みます。 私たちは初心を忘れることなく、原理原則にぶれることのない行動を取ります。
オープンであること	私たちはオープンな場で議論を行い、本人の前で行わない異議申し立ては禁止します。 私たちは全ての意思決定は公開の場で行うことにより、ポリティクスを排除し、偏った意見形成を行わないこととします。 私たちは意見の表出は建設的な提案として行い、反対意見がある場合は代替案を提示します。
前向きであること	私たちはできないことについて後ろ向きの言動を行わず、できることで最善のことを考え、実行します。 私たちは明るく・元気よく・楽しく、をモットーに行動します。
仕事に責任を持つこと	私たちはLiving in Peaceにおける自身の役割・仕事について責任感を持ち、最後までやり遂げます。
本業／学業を大切にすること	私たちは、本業／学業に重く価値を置き、そこにおいて秀でることができるよう最大限の努力をします。 私たちは、Living in Peaceの活動によって本業/学業を犠牲にしません。

これらの行動基準を実践し、継続して活動できる、熱意を持ったメンバーを求めています。
まずはオンラインでの定例ミーティング見学にお越しください。詳細はこちらから。

私たちの歩み

Living in Peaceは2007年の設立以来、「すべての人に、チャンスを。」という
ビジョンの実現に向けて活動の幅を広げてきました。

2007
- 4名の有志による貧困の終焉のための勉強会を開始
- 勉強会をきっかけに Living in Peaceを結成

2009
- NPO 法人格を取得
- 日本初のマイクロファイナンスファンドを企画（ミュージックセキュリティーズと提携）
- カンボジア第1ファンドで約 2,500万円の調達に成功
- こどもプロジェクトがスタート、児童養護施設「筑波愛児園」へ訪問

2010
- 児童養護施設の建て替え支援事業とキャリアセッション事業を開始
- カンボジア第2ファンドで約1,500万円の調達に成功

2011
- カンボジア第3ファンドで約 3,000万円の調達に成功

2012
- 認定 NPO 法人の認定取得
- 児童養護施設「筑波愛児園」の建て替え支援を実施
- ベトナム第1ファンドで約 2,500万円の調達に成功

2013
- カンボジア第4ファンドで約 4,000万円の調達に成功

2014
- 「Chance Maker 奨学金事業」を開始
- ベトナム第2ファンドで約 4,000万円の調達に成功

2015
- 児童養護施設「鳥取こども学園」建て替え支援を実施
- カンボジア第5ファンドで約 6,000万円の調達に成功

2016
- 関西を拠点とした活動を開始

2017
- 児童養護施設「広島新生学園」建て替え支援を実施

2018
- 慎泰俊が理事長を退任。中里晋三・龔軼群が代表理事に就任
- 永和町拠点が奈良県大和高田市に完成
- 一般社団法人 MY TREE への支援が決定
- 難民プロジェクトを発足し、難民学生の就職支援を開始

2019
- ミャンマー第1ファンドで約4,000万円の調達に成功
- 「お金の教育事業」を開始
- 児童養護施設「東京育成園」と里親制度普及啓発事業の協業を開始
- 日本に暮らす難民への日本語学習の機会を提供する「LIP-Learning」を開始

2020
- ミャンマー第2ファンドで約2,500万円の調達に成功
- インドネシアの su-re.co との共同事業を開始
- 難民学生の就職支援にて国連難民高等弁務官事務所（UNHCR ）との業務提携を開始
- 東京大学と「移民・難民二世のキャリア形成に関する調査研究」を開始

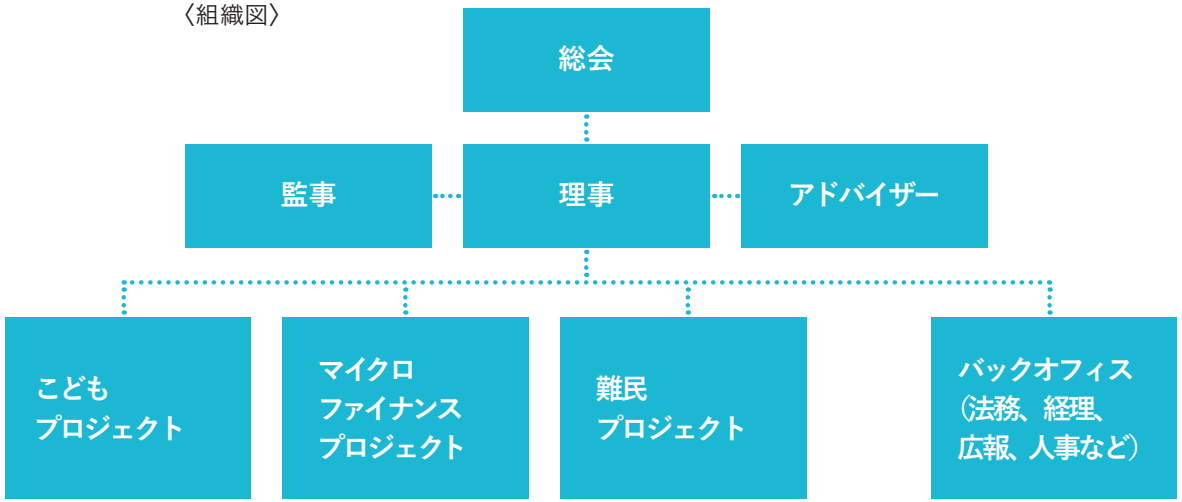
2021
- 日本児童相談業務評価機関（J-Oschis）の創設に協力
- 外国籍の子育て世帯に対する緊急支援を実施

2022
- ケニアでのファンドを組成
- 建て替え支援の資金調達を完了

Living in Peace ALL プロジェクト　こどもプロジェクト　マイクロファイナンスプロジェクト　難民プロジェクト

団体概要

名称：認定特定非営利活動法人 Living in Peace
2007年10月28日 結成
2009年4月13日NPO法人格を取得
2012年7月16日 認定NPO法人を取得

団体所在地：〒103-0026　東京都中央区日本橋兜町 5–1
創設者：慎泰俊
代表理事：中里晋三、襲軼群
理事：木下祐馬、小林裕二、湖山勝喜
監事：五十嵐裕美子（五十嵐綜合法律事務所弁護士）、
鈴木瞳（元 マカイラ株式会社 執行役員）
アドバイザー：
小森哲郎（株式会社ファイントゥデイ 代表取締役社長兼 CEO）、
河口真理子（立教大学 21 世紀社会デザイン研究科 特任教授）
メンバー：135 名（2023 年 12 月現在）

〈組織図〉